陸子学禅考

久須本文雄

陸象山の学禅の問題については、周・張・程諸子と稍〻異なり、禅と直接の関連ある資料が乏しいので、これを充分に確証づけることが困難である。それで、可能な限り多面的な観点に立って、彼の周辺に於ける関接的な禅的関連からも、その学禅の状態を解明しようと思う。

象山が、当時に於ける禅界の誰に参禅して禅を修学したかについて、象山全集によって検索するも、これを窺うことができないが、然し、次の資料に徴して、禅との交渉を知ることができる。すなわち、宋末の周密（字公謹）の齊東野語（巻十一）に

横浦張氏子韶、象山陸氏子静、皆以其学伝授、而張嘗参禅宗杲、陸又参杲之徒得光、故其学往往流於異論而不自知。

（明、毛晋、津逮秘書、第十五集及び明、商濬、稗海、第十函所収）

とあり、同じく宋末の朱子門人である陳淳（字北溪）の答趙季仁書に

象山本得於光老。

（北溪集、第四門、巻十四）

とあり、更に明の崔銑の楊子折衷（明、湛甘泉著）序にも

仏学至二達磨曹溪一、論転径截、宋大慧授二之張子韶一、其徒得光又授二之陸子静一、子静伝二之楊慈湖一。

（湛甘泉先生文集、巻十七）

とある。この斉東野語・北溪集・楊子折衷序によると、禅学を大慧宗杲が張子韶（名九成、号無垢）に授け、大慧の徒得光が象山に授け、象山が楊慈湖に伝えたとしている。明の陳建（号清瀾）の学蔀通弁[1]に、斉東野語と楊子折衷序の該文を引載しているが、その両文の後に

由之観之、然後知象山養神宗旨皆出二於宗杲得光之緒余一、而陸学無二復弁一矣。

と評している。これは陳建が周・陳・崔と同じく、象山が大慧の徒徳光に参禅し、徳光によって禅要を得たものとして象山の学禅を認め、それが彼の思想に及ぼしているとしているものである。これらの資料に徴して、象山が徳光に参禅して、彼から直接禅旨を伝授されたことが知られる。学蔀通弁に、陳建が崔銑説の典拠について

按、崔公此叙其確、第未詳得光授二子静一来歴出二何書一、必有二明拠一、恨聞見孤陋、不レ及見二崔公一扣レ之、姑記俟レ考。

（終篇、巻下）

と評しているが、蓋し、崔銑は陳淳及び周密の所説に拠って、これを楊子折衷序に引載したものと思われる。陳淳及び周密の説の典拠については、今これを明らかにすることはできない。既掲の崔銑の所謂、子静伝二之楊慈湖一は、北溪集及び斉東野語には記せられていないので、これは崔銑の説とすべきであろう。後で触れるが、楊慈湖は陸象山門下に於いて、殊に禅的な性格と思想が顕著であるため、崔銑の説は首肯せられる。

象山に禅要を伝授したとされている徳光の伝については、仏祖歴代通載（巻三十一）・五燈会元（巻二十）・古尊宿語

録(巻四十八)などに収録されている。これらの資料に徴して、徳光伝を抄録してみよう。

育王仏照禅師(臨済宗)は、大慧宗杲禅師の法資にして、南嶽懐譲下第十六世、姓は彭氏、諱は徳光、東庵と号す。南宋代、臨江新喩の人。十歳の時、出家せば法門の梁棟になると称せらる。二十一歳にして、人の金剛経を誦するを聞き、忽然通解する所あり。この年、東山光化寺の足庵吉禅師によって薙髪し、仏門に入る。一日、入室して道を求め示誨を蒙りて省あり。後、閩に入り、福州の西禅寺に住し、尋いで月庵杲に謁す。育王の大慧宗杲に参じ、大いに契悟する所あり。杲再び径山を領するに及び、蔣山に応庵を省し、月余にして径山に還える。乾道三年(一一六七)、李侍郎に請せられて四明の鴻福寺に遷り、尋いで天寧寺に住す。大いに禅幡を挙揚するに及んで、四来の雲衲踵を継いで集る。孝宗その高風を欽仰し深く師に帰依す。淳熙三年(一一七六)、命じて霊隠寺に住せしむ。同年、召されて九重に至り、対応旨に称い、中観堂に留まらしむ。特に御頌及び仏照禅師の号を賜う。同四年、亦召されて奏対旨にかない、帝悦び、親しく宸翰を賜う。よって、宗門直指一篇を奏上す。紹熙元年(一一九〇)、帝、重華宮に召見し、同四年、勅して径山に住せしむ。慶元元年(一一九五)、老を以て退隠を請うこと再三、遂に允許さる。嘉泰三年(一二〇三)、寿八十三を以て寂す。後、普慧宗覚大禅師の諡を賜う。

更に、心泰(明)の仏法金湯編には、資鑑の文を引いて次の如く記している。

淳熙三年春、詔台州報恩光孝寺住持徳光入見、光以二月渡江、上問、古有浮笠而渡者、可謂神通、光曰、宗門下不貴神通、只貴眼明、上悦、勅住霊隠継遠之席、十一月召光入内観堂、上問、朕心与仏心是同是

別、光曰、直下無第二人、上曰、恁麼則仏即是心、心即是仏、光曰、成一切相即心、離一切相即仏、又問、釈迦老子雪山六年、所成何事、光曰、将謂陛下忘却、皇情大悦、賜号仏照。（第十四、孝宗条下）

すなわち、彼は育王徳光であって、径山仏照徳光禅師とも、仏照禅師とも称せられた。それで、周密の斉東野語や崔銑の楊子折衷序に於ける所謂、得光は誤りで徳光[2]とすべきである。仏法金湯編に徴しても、徳光は、淳熙三年内観堂に召されて、心即是仏の禅要を奏対し、孝宗の帰依を厚くした。徳光が大慧に師事し、参禅弁道したることは、仏祖歴代通載・五燈会元・古尊宿語録・続伝燈録などに徴して明らかである。徳光は宋徽宗宣和三年（一一二一）に生れ、南宋寧宗嘉泰三年（一二〇三）に、八十三歳を以て入寂しているが、大慧は孝宗隆興元年（一一六三）に、七十五歳を以て寂している。それで、大慧は徳光の寂年より四十年前に寂していることとなる。すなわち、大慧の寂年は、徳光が四十三歳の時に相当している。象山と大慧について見るに、象山は紹熙三年（一一九二）、五十四歳を以て歿しているから、それより二十九年前に大慧が寂している。すなわち、大慧の寂年が象山の二十五歳に当るのである。次に、象山と徳光とについてこれを見るに、徳光は象山の歿年より十一年後に寂しているので、象山の歿年は徳光の七十二歳に当る。茲を以て、象山の徳光参禅については、これを明確に推定することは容易ではないが、蓋し、象山の晩年、五十歳前後頃ではなかったかと思われる。この推定によるならば、徳光の六十八歳前後に参禅したこととなる。その象山の徳光師事当時は、大慧は既に二十数年前に世を去っている。象山が徳光に参禅したことは明らかである。既掲の該書に、彼が大慧に参禅したことを記していないけれども、徳光の師大慧にも、参禅し交渉がなされたものと思われる。大慧の寂年が、象山の二十五歳に相当しているから、象山の大慧参禅は、年令的

にこれを是認することが可能とすべきである。象山が大慧に参禅したとすれば、象山の二十歳から二十五歳迄の数年間で、これは大慧の七十歳から寂年の七十五歳に至る間とすべきであろう。朱子が

陸子静従初亦学禅。　（学蔀通弁、続篇、巻上、語類引載）

と称しているが、これは徳光参禅が象山の晩年に属しているから、大慧による学禅を暗示するものではないかと思われる。

大慧は只管打坐の黙照禅、すなわち曹洞禅ではなくして、看話禅すなわち臨済禅、殊に楊岐派に属していたので、その徒たる徳光も、師大慧の看話禅を相承して、臨済の宗風を宣揚したことは、論を俟たない所である。茲を以て、象山が徳光に参禅したことを是認する限りに於いて、彼は大慧及び徳光の看話禅的思想を体得し、以て彼の思想・学説に資したものとすべきである。象山の学風をくむ王陽明に、看話禅的な思想傾向の存することを認めるを以て、一面象山の看話禅的傾向が、陽明の思想に影響を及ぼしたものとも考えられる。象山在世当時も、禅学が隆盛していたので、彼が徳光及び大慧以外に、多くの禅界の巨匠に参禅し交遊したものとすべきであり、なお、当時かくの如き事情であったので、彼が特に求師求法して学禅せずとも、禅旨の大要はこれを把捉していたものとすべきである。

象山の仏学に対する素養として、彼が閲読したる仏教典籍についてこれを見るに、象山全集に

某雖不曾看釈蔵教、然而楞厳円覚維摩等経則嘗見之。　（巻二）

とある。かく彼の述懐する所に徴して、彼が禅家常用の重要経典を閲したことは明らかである。その所謂、楞厳・

円覚の両経は、宋代に於いて、禅界の諸師が盛んにこれを講唱したるのみならず、一般在俗の輩もこれを誦読したるものである。これについては、道元の宝慶記に

首楞厳経円覚経、在家男女読之、以為西来祖道、（中略）、近代癡暗之輩、読之愛之、円覚経亦然。

とあるに徴して、これを窺うことができ得るであろう。殊に、首楞厳経は禅家に於いて日用諷経のもので、円覚・維摩の両経と共に所依経典である。彼は愛誦したる楞厳・円覚・維摩の他に、多くの禅籍を閲したとすることは首肯するに難くない。彼が禅籍について

虎穴魔宮実為仏事、淫房酒肆尽是道場、維摩使須菩提置鉢欲去之地、乃其極則当是時十地菩薩。

（象山全集、巻二）

と述べている所は、上述の三経典中の維摩経に論及しているものであるが、彼が一黙の中に絶対不二の理を具現した維摩詰と、諸法皆空の直解に悟入した須菩提とを挙げていることは、仏禅的見解の尋常でないことを証するものというべきである。その所謂虎穴魔宮実為仏事、淫房酒肆尽是道場は、楞厳経に所謂魔界如即仏界如、及び維摩経に所謂貪瞋邪見即仏性に彷彿し、その他、禅学に於ける煩悩即菩提・生死即涅槃・平常心是道場と趣を異にしない。これによっても、彼が最大乗たる禅、殊に看話的な臨済禅の見地に立つものといえる。茲を以て、彼の仏禅に対する素養は看過され得ないもので、彼の思想・学説が禅的色彩を帯びるに至ったのは、論を俟たない所であろう。なお、彼が当初から、程伊川の学風に慊焉たらずして、これを以て支離の学となし、兄程明道の学風に傾慕したことに徴しても、その見識の禅的なるを窺うに足る。

象山の仏典の渉猟について述べたから、これに関連して、彼の禅機的なものについて窺見しようと思う。彼は幼少より資性俊偉英明にして、静重なること成人の如くで、神童的言行多く、事に応じ物に接して省発することが常であった。三、四歳にして、嘗て父賀(字 道郷)に

天地何所窮際。　（全集、巻三十六、年譜）

と発問したるに、父笑って答えず、遂に深思熟考し、寝食を忘れるに至った。彼が宇宙に対して大疑を懐く底は、群児と異なるもので、既にその禅的心機の萌芽を見ることができる。十三歳の時、古書を読み宇宙の二字を解して

四方上下曰宇、往古来今曰宙。(4)　（同上）

とあるを見て、忽ち省して

元来無窮、人与天地万物、皆在無窮之中者也。　（同上）

と述べ、これを書して曰く

宇宙内事乃己分内事、己分内事乃宇宙内事。　（同上）

と。更にその心境を開陳して

宇宙便是吾心、吾心即是宇宙、東海有聖人出焉、此心同也、此理同也、西海有聖人出焉、此心同也、此理同也、南海北海有聖人出焉、此心同也、此理同也、千百世之上至千百世之下、有聖人出焉、此心此理亦莫不同也。　（同上）

と。陳建は象山の宇宙説について、それが仏教の法界周遍・法身常住に類しているとして次の如く述べている。

按、象山講学、好説宇宙字、蓋、此二字尽上下四方往古来今、至大至久、包括無窮也、如仏説性周法界十方世界是全身之類、是以至大無窮言也、如説法身常住不滅覚性与太虚同寿之類、是以至久無窮言也。

（学部通弁、後篇、巻上）

象山はこの宇宙に対する省悟を以て、終生彼の学説の根幹となしたのであるが、これは自己と宇宙との融会不二なること、すなわち主客合一の境地を現わしたるもので、禅学に於ける心境一如・物我同会・万法唯心・心外無法の所にして、肇論（涅槃無名論）に懐六合於胸中、或は物我冥一と称するのと異ならない。茲を以て、陳建は

此象山宇宙無窮之説、吾心宇宙之説、一言而該禅学之全也。

（同上）

と称する所以である。象山十五歳の時に於ける志学[5]の詩の中に

書非貴口誦、学必到心斎。

（全集、巻三十六）

とあるが、この所謂、心斎は荘子[6]の人間世に出ているもので、真知を得るため情欲を掃除して、心を静虚純一にする功夫にして、禅に於ける無心或は無念に当り、僧肇の所謂

般若可虚而照。

（肇論、般若無知論）

はこの意を出でない。その所謂、学必到心斎は、宇宙便是吾心、吾心即是宇宙と共に、彼が心即理説を唱える端緒が茲に見られ得る。彼の幼少に於ける禅的風調は、更に

学苟知本、六経皆我註脚。

（全集、巻三十四）

六経註我、我註六経。

（同上）

の心境となっている。これは、禅宗が一切蔵経は悉く吾心の一字を説くとするのと類し、なお、

平生所説、未嘗有一説一　（全集、巻三十五）

は、世尊未説・達磨不識(7)の如き、一字不説・不立文字の禅的識見というべきである。更に、彼の禅機的なものを見るに

梭山嘗云、子静弟高明、自幼已不同、遇事逐物、皆有省発一、嘗聞鼓声振動牕櫺一、亦豁然有覚。　（全集、巻三十六）

と。茲に、白隠が隻手の声によって開悟し、或は香厳が撃竹の声によって省発し、或は霊雲が桃花の開くを観て省悟したる如き心機の顕現が存する。なお、象山と朱済道との対話を見るに

朱済道力称賛文王一曰、文王不可軽賛一、須是識得文王一、方可称賛一、済道云、文王聖人、誠非某所能識一、曰、識得朱済道一便是文王。　（全集、巻三十四）

と。その象山の所謂、識得朱済道一便是文王は、唐の清涼文益が慧超の如何是仏の問に対して、汝是慧超と答えたる所（碧巌録、第七則、慧超問仏）と類を同じくするもので、茲にも、象山の禅機と、その簡易直截の学風を窺うことができる。茲を以て、王陽明は象山の学を以て簡易直截と評する所以である。

象山之学、簡易直截、孟子之後一人、其学問思弁致知格物之説、雖亦未免沿襲之累一、然其大本大原、断非余子所及也。　（王文成公全書、五、与席元山一）

自是而後、有象山陸子一、雖其純粋和平若不及二子一（周程）、而簡易直截、真有以接孟子伝一

（同上、七、象山文集序）

簡易の学を説く象山は

天下之理、将従其簡且易者而学之乎、将欲其繁且難者而学之乎、若繁難者果足以為道、労苦而為之可也、其実本不足以為道、学者何苦於繁難之説、簡且易者、又易知易従、又信足以為道、学者何憚而不為簡易之従乎。

（全集、巻三十四、語録）

易簡工夫終久大、支離事業浮沈、欲知自下升高処、真偽先須弁只今。[8]（全集、巻二十五、鵞湖和教授兄韻）

と、見聞の煩瑣、章句の支離に流れる朱子の学風を難じ、簡易直截の尊徳性の功夫こそ、遂に久遠高大の妙処に至ることができるとしている。

陸禅共に、人々固有の心地の光明、すなわち自内存の仏或は聖の照見を要諦とするを以て、かかる象山の禅的識見の存するは当然とすべきである。象山が所謂

汝曾知否、建安亦無朱晦翁、青田亦無陸子静。

（全集、巻三十四）

は、天地古今の間、晦菴もなく子静もなしとする所で、茲には、禅家に於ける仏を殺し祖を殺し、人我共に空じ、一切を呑了する底の鋭い禅的見識が見られる。茲を以て、陳建が学蔀通弁に於いて

象山禅機深密。

（終編、巻中）

此正是象山禅機深処。

（後編、巻中）

と評する所、宜なるものというべきである。而して朱子が

陸子静分明是禅。　（朱子語類、百二十三）

と評する口吻も首肯せられる。なお

其人再三称歎云、天下皆説先生是禅学。　（全集、巻三十四）

に徴して、当時の者も象山の学風を指して、禅学となしていることが知られる。象山の思想性行は、禅味を多分に帯びていたため、高弟楊慈湖の学が禅学と化するに至ったのは論を俟たない。（慈湖については後述）

次に、象山と関係ある寺刹について、これを全集に徴して窺って見たい。淳熙十四年（一一八七）、象山四十九歳の時、門人彭世昌の懇請により、江西貴溪の応天山に赴き、茲に象山精舎を建立し、五十三歳知荆門軍に叙せられる迄、五星霜の間、象山精舎に於いて、従容として道を講じていたのであるが、彼は象山の由来を与王謙中書の中に

郷人彭世昌新得一山、在信之貴溪西境、距敝廬両舎而近、唐僧有所謂馬祖者、廬于其陰、郷人因呼禅師山、元豊中有僧瑩者、為寺其陽、名曰応天寺、廃久矣、屋廬毀撤無余、故址埋於荆榛、良田清池没於茅葦、彭子竭力開闢、結一廬以相延、去冬嘗一登山、見其隘、復建一草堂于其東、山間亦粗、有田可耕、社日後携二息偕数友朋登山、盤旋数日、尽発茲山之秘要領之処、眼界勝絶、乃向来僧輩所未識也、去冬之堂在寺故址、未愜人意、方於勝処為方丈以居、顧視山形、宛然鉅象、遂名以象山、草堂則扁曰象山精舎、郷人蓋素恨此山之名辱於異教、今皆翕然以象山為称。（全集、巻九、与王謙中書、一）

と記し、なお、与朱子淵の書中にも

唐僧有所謂馬祖者、嘗廬于其陰、鄉人因呼禅師山、元豊間、又有僧瑩者、為寺其陽、号曰応天、（以下省略）。

（全集、巻十三、与朱子淵書、二）

と記している。これによると、象山は唐代に馬祖道一嘗て茲に草廬を結んでより禅師山と称呼され、降って宋神宗元豊年間、僧瑩が応天寺を建立してより、応天山と改称したとしている。かくの如く、象山精舎の在る象山は、馬祖道一及び僧瑩等が化を厚くしたる所で、仏教殊に禅宗と関係が浅くない。象山が精舎の風致及びその周辺の山景について、

方丈簷間層巒疊嶂奔騰飛動、近者数十里、遠者数百里、争奇競秀、朝暮雨暘、雲煙出没之変、千状万態、不可名模、両山廻合其前、如両臂環拱、臂間之田、不下百畝、沿流而下、懸注数里、因石賦形、小者如線、大者如練、蒼林陰翳、巨石錯落、盛夏不如有暑、挾冊其間、可以終日。（全集、巻九、与王謙中書、一）

巨陵特起、宛然如象、名曰象山、山間自為原塢、良田清池、無異平野、山澗合為瀑流、垂注数里、両崖有蟠松怪石、却略偃蹇、中為茂林瓊瑤氷雪傾倒激射、飛灑映帯於其間、春夏流壮、勢如奔雷、木石自為階梯、可沿以観。

（全集、巻二、与朱元晦書、一）

と叙しているが、それに徴すると、実に山水絶佳にして境地幽邃なることが知られる。彼が特に該山を愛していたことによっても、かかる禅的雰囲気が、彼の思想・性格に多大の影響を及ぼしたることは首肯するに難くない。象山三十四歳、乾道八年（一一七二）七月の年譜に、与顔子堅書（全集、巻三十六）を載せているが、その書中に向者在八石寺とあるを以て、貴溪（江西）近隣の八石寺に留在したとすべきである。

淳熙二年（一一七五）、象山三十七歳の時、朱子と会論して、遂に朱陸両家の説合わなかったが、その所謂鵝湖の会は、江西信州の鵝湖寺に於いてなされ、同八年彼四十三歳の時、朱子の請に応じて論語義利[9]の弁一章を講じたのは、廬山の白鹿洞書院であった。殊に、廬山は景趣絶佳の幽境にして、東林・開先・西林・天池・能仁等の禅刹散在して江南仏教の枢要の地である。彼は廬山に赴いた節、該山の禅刹を訪歴したものと思われる。同十三年、四十八歳にして郷に帰り講席を設けたが、従学するもの多く

環坐率二三百人、至不能容、徙寺観。　（全集、巻三十六、年譜）

とある如く、席を寺刹に移したる程の盛況であった。同十五年、彼五十歳の秋八月、僊厳に遊んでいるが、この時、新興寺に赴き、題新興寺壁（全集、巻二十）をものしている。すなわち、年譜に

秋八月遊僊厳、題新興寺壁。　（全集、巻三十六）

とある。翌十六年の年譜に

（冬至）後三日、遊翠雲寺、題名于壁。　（同上）

とあるから、五十一歳の晩に翠雲寺（題翠雲寺壁、全集、巻二十）に遊んでいることが知られる。その後、紹熙二年（一一九一）五十三歳の年譜を見るに

跋資国寺雄石鎮帖、寺在象山之西址、隔溪之山間、先生往来必憩焉。　（全集、巻三十六）

とある。これによると、同年春、象山の西址にある資国寺（跋資国寺雄石鎮帖、全集、巻二十）に遊行すること屢々であった。全集、巻二十五に、題慧照寺[10]の詩を収録し、その中に春日重来慧照山とあるに徴して、慧照寺を訪歴した

ことが知られる。年譜に徴するも、その訪刹年歳を詳にしない。上述の如く、彼は八石寺・鵝湖寺・廬山・新興寺・象山・翠雲寺・資国寺その他、慧照寺等に遊歴しているが、彼がこれら各刹各山の雰囲気から受けたる仏禅的な影響は、鮮少でなかったであろうと思われる。

終りに、象山の家学及び交友・先輩について、その禅的環境を窺い、以てかかる関連からも、彼に禅的趣致がかもされた所以を述べようと思う。

象山全集、巻三十六、年譜によると、象山の祖父戩は、殊に釈老の学を好み、父賀は心を典籍に究め実践躬行を本とした。

賀の第四子陸梭山（名九韶、字子美）は、復斎・象山の兄にして、嘗て朱子に書を与えて、周濂溪の太極図説は、通書と類せざるを以てその作にあらずと論じ、往復弁難する所があった。彼は科挙を事とせず、二弟と共に古学を講じていた。梭山日記（象山全集、巻三十六末所収）は、居家正本と居家制用の両篇よりなるが、学問は名利のためにするにあらずして、道を知るためになすことを説き、殊に後者は日用経済のことを述べている。彼の徳性及び名利についての説を、居家正本に徴して見るに

秀異者入学、学而為士、教之徳行、愚謂、人之愛子、但当教之以孝弟忠信、所読須六経論孟。

今行孝悌本仁義、則為賢為知、賢知之人、衆所尊仰、（中略）、豈非得其本而末自随乎、（中略）、豈非趨其末而本末俱廃乎。

夫謀利而遂者不百一、謀名而遂者不千一、今処世不能百年、而乃徴幸于不百一不千一之事、豈不瘢甚矣

哉。

と。彼によると、学問は名聞利欲のためにするにあらずして、道を知るにあるもので、須らく本を務むべきである。要するに、彼の学問は尊徳性を主とし、併せて経済実用を重視するものである。

賀の第五子陸復斎（名九齢、字子寿）は、梭山の弟にして幼より穎悟、弟象山と共に江西二陸と称せられた。嘗て、彼は朱陸と共に鵝湖寺に会した。彼も兄梭山と同じく極めて着実な学をなし、その伝に所謂深観黙養（宋元学案、巻五十七）、或は

声気容色応対進退、乃致知力行之原、不若是、而従事于箋注訓詁之間言語議論之末、無乃与古之講学者異歟。（同上、与張敬夫）

身体心験使吾身心与聖賢之言相応、択其切己者勤而行之。（同上、答王漢臣）

に徴すると、その学風の内省的・践履的なることが知られる。なお、彼が

不知命無以為君子、此意不可不先講習、習到臨利害得失、無憂懼心、平時胸中泰然無計較心、則真知命矣。（同上、与劉淳叟）

或は鵝湖示同志詩の中に

孩提知愛長知欽（敬）、古聖相伝只此心。（同上）

と称する所は、利欲を去り此の心を存するを以て、学問の本領とするものであり、黄東発が所謂

復斎之言、視孔孟、似頗直截也。（同上）

に徴するも、極めて簡易直截的である。これ梭山・象山、かくの如くにして、陸学の特色をなすものといえる。象山の学友劉静春が

陸子寿兄弟之学、頗宗無垢。　（同上、巻五十七）

と称しているが、これは復斎・象山の学が、大慧に参禅交遊して禅要を得たる張無垢の所謂

或問、六経与人心所得如何、曰、六経之書、焚焼無余、而出于人心者常在、則経非紙上語、乃人心中理耳。　（同上、巻四十、横浦学案）

なる思想傾向を本としたると共に、彼の禅的学風にも拠っていることを述べたものというべきである。なお、朱子の所謂

上蔡之説一転而為張子韶、子韶一転而為陸子静。　（同上、巻二十四）

も、禅味溢れる謝・張二子の学が、象山始め復斎にも影響を及ぼしていることを称するものである。父祖殊に、梭山・復斎両兄の簡易直截実践躬行を旨とする学風が、弟象山にも影響して禅的な趣を醸し、他面、謝・張二子の象山に与えた禅的影響も看過できない。

象山の講友林艾軒（名光朝、字謙之）は、象山より二十五歳の年長にして、陸景端（字子正）に従学して聖賢践履の学に専念した。艾軒学案（宋元学案、巻四十七）によると

未嘗著書、惟口授学者、使之心通理解。

嘗曰、道之本体全于太虚、六経既発明之、後世注解已渉支離、若復増加道愈遠矣。

又曰、日用是根株、言語文字是注脚。

とあるが、これに徴しても、彼が践履を重視して、言詮に馳せざる学風を窺うことができる。その所謂言語文字是注脚は、象山が「六経を以て我の注脚」と道破したる趣と同じで、禅また然りである。

象山の前輩林竹軒（名季仲、字懿成）は、宣和の進士にして、象山より長ずること十四歳である。竹軒の直閣送虞仲琳詩（宋元学案、巻三十二）に

儒生底用苦知書、学到根源物物無、曾子当年多一唯（論語、里仁）、顔淵終日只如愚（論語、為政）、水流万壑心無競、月落千山影自孤、把手沙頭莫言別、与君原不隔江湖。

とあるが、これ竹軒の心を主とする簡易の学風を窺うのみならず、禅的風格の存するのを見ることができる。全祖望が

已開象山宗旨矣。（同上）

と称する所によっても、象山への影響を無視することができないであろう。

茲に林艾軒の師陸子正が、従学したる王震沢（名蘋、字信伯）（宋元学案、巻二十九、震沢学案）について附記するに、彼は伊川に師事したが、その学風却って明道・上蔡に近似する如くである。全祖望は彼を評して

王信伯極為亀山所許、而晦翁最貶之、其後陽明又最称之、予読信伯集、頗啓象山之萌芽。（同上）

と。すなわち、上蔡・震沢の二子は、象山の先駆をなしたるを以て、朱子は震沢を貶毀し、陽明は彼を推尊したのである。震沢の学が、象山の萌芽を啓き、かつそれに近きは、禅に近似することを証する所以ともなる。茲を以て、

朱子が彼を貶する所以でもある。震沢の伝に

非伝聖人之道、伝其心也、非伝聖人之心、伝己之心也、己之心無異聖人之心、万善皆備、故欲伝堯舜以来之道、拡充是心焉耳。（同上）

とあるが、これは禅家に所謂以心伝心の説にして、凡聖一心・生仏不二の所である。なお

問、如何是万物皆備于我、先生正容曰、万物皆備于我、某于言下有省。（同上）

といえるは、全祖望が

此亦近乎禅家指点之語。（同上）

と評する如く、唐の法眼禅師清涼文益（八八五―九五八）の

有禅者、問、如何是曹源一滴水、法眼曰、是曹源一滴水、韶聞大悟。（人天宝鑑、上）

に於ける啐啄同時の機と趣を同じくするものである。

程明道・謝上蔡より王震沢・陸子正を経て、林艾軒に伝承されたる禅的な簡易直截にして心を主とする学が、象山に影響したというべきであろう。すなわち、全祖望が

程門自謝上蔡以後、王信伯林竹軒張無垢至林艾軒、皆其前茅、及象山而大成。（宋元学案、巻五十八）

と評している所である。なお、象山の学友にして禅的な慈湖の父である、楊庭顕(11)（字時発）の心を主とする禅に近い学風も、象山に影響したる所があったと思われる。終りに、陸学の後継、殊に楊慈湖について附記することとする。

楊慈湖（名簡、字敬仲）は、浙江慈溪の人。孝宗乾道五年（一一六九）、進士の第に登り、富陽縣主簿に調せらる。嘗て反観して

天地万物通為二一体一、非吾心外事。　（宋元学案、巻七十四）

と称す。慈湖、富陽にありし時、象山に会し屢〻本心の二字を提起す。象山が是なる者はその是なるを知り、非なる者はその非なるを知るのが、すなわち本心なりと説くを聞きて、深く覚り始めて入門の礼を執る。慈湖は天性剛毅にして自信に強く、その性格は象山に類している。彼は象山に倣って平生践履を主とし、一点の瑕玷なく、閨門に処ること大賓に対するが如く、闇室にあること上帝に臨むが如く、終生兢兢敬謹して、未だ嘗て須臾も放逸しなかったといわれている。彼の高潔恭敬なることこれによっても知られる。

慈湖は師象山の唯心説を継承し祖述して、心は唯一無二にして、宇宙の根源的本体となしている。彼が心について記する所を、宋元学案、巻七十四に徴して見るに

人心自明、人心自霊。　（絶四記）

至霊至明之心。　（同上）

無強無弱者心也、無断無続者心也。（己易）吾性澄然清明而非物、吾性洞然無際而非量。（同上）

とある。なお、彼の説を見るに、すなわち、心は本来至霊至明にして、強弱断続なく、少壮衰老の別なく、無始無終遠近小大なく、古今前後なき当体である。而して、本来霊明広大なる心は、外に求めるにあらずして、先天固有のものであるとして、絶四記に次の如く述べている。

是非之心、人皆有之、仁義礼智、非由外鑠、我固有之也。

人皆有至霊至明広大聖智之性、不仮外求、不由外得、自本自根自神自明。

清明之性、人之所自有、不求而獲、不取而得。

茲を以て、万物は我が心の外に存在するのでなく、総べて唯心の現れで、天地は我の天地にして、その変化は我の変化であり、天地の清明博厚は我の清明博厚であり、天地の形象は我の為す所で、内外なく異殊なきものである。

天地万物、通為一体、非吾心外事。（伝記）

礼儀三百威儀三千、非吾心外物也、故曰、性之徳也、合内外之道也。（己易）

天地我之天地、変化我之変化也、非他物也。（同上）

地清明者吾之清明、博厚者吾之博厚、而人不自知也、天者吾性中之象、地者吾性之形、故曰、在天成象在地成形、皆我之所為也、混融無内外、貫通無異殊。（同上）

なお、学蔀通弁に、彼の遺書として載せて次の如く記している。

即達磨謂、従上諸仏、惟以心伝心、即心是仏、除此心外、更無別仏、汝問我、即是汝心、我答汝、即是我心、汝若無心、如何解問我、我若無心、如何解答汝、観此益験、即日用平常之心、惟起意為不善、此心至妙、奚容加損、日月星辰即是我、四時寒暑即是我、山川人物即是我、風雨霜露即是我、鳶飛魚躍無非我。（後編、巻上）

すなわち、彼は我以外に天地万物の存在を認めざるもので、明らかに唯心論的立場にある。これ万法唯一心・心

外無法の所にして、禅学に於ける唯心思想に他ならない。かくして、彼は

吾未見夫天与地与人之有三也、三者形也、一者性也、亦曰道也、亦曰易也、名言之不同、而其実一体也。（己易）

忽覚空洞無内外、無際畔、三才万物、万化万事、幽明有無、通為一体、略無縫罅。（学蔀通弁、後編、巻上）

と、天地人三才を以て一体となすもので、禅家の一体観と異ならない。彼が

一日洞覚則知生死之非二矣。（同上）

と称するは、禅門に於ける死生一如の人生観にして

此心常見于日用飲食之間造次顚沛之間、而人不自省。（同上）

は、唯心が日用常行底に所現することを述べたもので、禅また然りというべきである。

以上に徴しても、慈湖の宇宙論・心性論・人生観は、禅学のそれと類を同じくするもので、禅家の唯心説と軌を一にしているといえる。これ彼が師象山の禅的な思想性行の影響を受けているのは論を俟たないが、彼の性格と学禅とに負う所も少くなしとしない。彼の学説は、象山のそれと同じで禅学と称すべく、上掲の如く、達磨の心論を引く所によっても、いかに達磨禅に意が向けられていたかが知られる。茲を以て、陳建も

愚按、象山慈湖雖皆禅、然慈湖之禅直、象山之禅深、慈湖明尊達磨。（学蔀通弁、後編上）

と称する所以である。更に、陳建は象山・慈湖の思想が共に禅的なるも、象山に於いてはそれが潜在的であり、慈湖に於いては顕在的であるとして、次の如く述べている。

慈湖、（中略）、一切吐露無隱、若象山則遮掩諱藏、一語不肯如此道。　（同上）

究陸学一派、惟象山工於遮掩、禅機最深。　（同上）

象山が隠禅的であるだけ、禅機が深玄ともいえる。陳建が、慈湖の禅を直としたるに対して、象山の禅を深と評したることが首肯せられる。茲を以て、象山は陽儒隠禅の譏あるを免れない所である。然し、黄宗羲が

学象山而過者也。　（宋元学案、巻七十四）

といえる所を以てすると、慈湖は象山の主観的工夫を得て、更に一歩を進めたもので、象山よりも禅的であるといえるであろう。象山門下数百、その中著名なものは、楊慈湖・袁絜斎（名煥、字和叔）・舒広平（名璘、字元質）・沈定川（名煥、字叔晦）の四先生[12]と称せられ、皆陸学を隆盛ならしめたが、殊に慈湖による所多とすべきである。然し全祖望が

壞其教者実慈湖。　（宋元学案、巻七十四）

と称する如く、象山の学をして、その弊を長ぜしめ非難の焦点たらしめたのも、また慈湖ともいえる。これはいかに彼の学説・思想が禅的であり、陸学をして益々禅学に近似せしめたかを暗示するものであろう。

以上に於いて、陸象山の禅的環境について述べたのであるが、これを茲に要約してみよう。象山は大慧の徒徳光に参禅したるもので、それは彼の五十歳頃と思われる。なお、彼は徳光の師大慧にも中年頃参禅し、交渉があったものと思われる。茲を以て、大慧及び徳光に於ける臨済の看話禅を体得し、その彼が受けた禅的影響は多とすべきである。彼が禅家所依の経典たる楞厳・円覚・維摩その他の禅籍を閲したことは、彼の禅的素養の一端を証するも

のである。而して、彼には禅機の歴然たるものが存し、その萠芽は既に彼の幼少期に見られる。次に彼の訪刹であるが、鵝湖・新興・翠雲・資国の各仏刹、並びに禅趣に溢れた廬山・象山を遊歴して、その受けた感化は鮮少でない。終りに、彼の家学及び先輩知友の関係であるが、梭山・復斎両兄の内省的・実践的にして簡易直截な学風が象山に影響し、それが彼に禅的なものを、醸成せしめる素因のひとつとなったとも思われる。なお、謝上蔡・張無垢の禅的学風が、関接的にも象山に及ぼし、その先駆をなしたものといえるのである。その他、明道・上蔡より震沢・子正を経て講友林艾軒に伝わった、心を主とする簡易直截な学風と、その彼らの禅的思想とが、象山に及ぼしたことは論を俟たない所である。とにかく、象山の家学とその先輩講友とによっても、象山の学を大成せしめ、更に彼をして禅的たらしめたものといえる。要するに、象山が禅的な思想・性格を、醸成するに適した条件の下にあったというべきである。末尾に象山の経歴略表を記しておく。

高宗紹興九年 西紀一一三九生	
十　三　歳	物我一体の理を省発、幼少より禅機あり。
二　十　歳	大慧（自七十歳至寂年七十五歳間）に参禅？
二　十　五　歳	象山（二十四歳）の父賀卒。
三十四、五歳	楊慈湖入門、八石寺に遊ぶ（三十四歳）。
三　十　七　歳	朱子と鵝湖寺に会論。

四十三歳　●　廬山（白鹿洞書院）に赴く、禅刹遊歴？

五十歳前後　●　四十九歳より五十三歳迄象山に居住。
　　徳光（六十八歳頃）に参禅。
　　新興・翠雲・資国・慧照各刹遊行。

光宗紹熙三年
西紀一一九二年
五十四歳歿　●　明年十一月郷の永興寺に葬る。

●……朱子、西紀一二〇〇、七十一歳歿。

(1) 学蔀通弁の版本であるが、蓬左文庫（名古屋市）には、寛文三年（一一六三）刊と朝鮮刊の二種類の版本がある。寛文・安政（四年、一八五七）の両本は四冊で、朝鮮刊本は二冊であるが、三本共に十二巻である。寛文・安政両本の終篇、巻下には

近見河南崔后渠侍郎銑序楊子折衷、湛甘泉著、謂仏学至達磨曹溪、論転径截、宋大慧授之張子韶、其徒得光又授之陸子静、子静伝之楊慈湖、衍説詡章、益無忌憚、詆毀聖賢、重為道蠹、不有鑿菴渭厓諸公、中華其夷乎、按崔公此叙甚確、第未詳得光授子静来歴出何書、必有明拠、恨聞見孤陋、不及見崔公扣之、姑記俟考。

を録しているが、朝鮮本には収録されていない。寛文・安政両本の該文は、楊子折衷序に関するもののみである。次の文は寛文・朝鮮両本の後篇、巻中には収録されているが、安政本には欠如されている。

按宋末周公謹所著斉東野語謂、横浦張氏子韶、象山陸氏子静、皆以其学伝授、而張嘗参禅宗杲、陸又参杲之徒得光、故其学往往流於異端、而不自知、近見河南崔後渠侍郎銑序湛甘泉所著楊子折衷、謂仏学至達磨曹溪、論転径截、宋大慧授之張子韶、其徒得光又授之陸子静、子静伝之楊慈湖、衍説詡章、益無忌憚、詆毀聖賢、重為道蠹、近世論象山師友淵源、莫具於此二言矣、愚謂象山養神底裏近世学者既未嘗勘破、似（以？）此師承伝授、隠微亦未嘗攷識、而惟軽信其改換遮掩之言、所以坐為所蔀也、由之観之、然後知象山養神宗旨皆出於宗杲得光之緒余、而陸

学無復弁矣。

これによると、楊子折衷序の文が、寛文本には後・終両篇に、安政本には終篇に、朝鮮本には後篇に、それぞれ収録されている。斉東野語の文は、寛文・朝鮮両本の後篇に収録されているが、安政本には存していない。既掲、後文中の「近見河南」の見は、安政本によったが、寛文・朝鮮両本には日となっている。蓋し日の字は誤字であって見が正しい。なお、「似此」の似について、寛文・朝鮮両本とも似になっているが、恐らく以の字であろう。

(2) 仏祖歴代通載の彼の伝に於ける

父術母袁、夢異僧入室、驚寤有娠、既生、乃祖曰、吾家世積德、乃生此児、必光吾門、因是命名。

に徴しても、徳光であることは明らかである。

(3) 象山の所謂

維摩使須菩提置鉢欲去之地。

の典拠を、維摩詰所説経（昭和新纂国訳大蔵経、経典部、第六巻）に徴して見ると次の如くである。

仏、須菩提に告げたまはく「汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ」。須菩提、仏に白して言さく、『世尊、我、彼に詣りて疾を問ふの任に堪へず。所以はいかん。憶念するに、我、昔其舎に入りて従ひて食を乞ふ。時に、維摩詰、我鉢を取り飯を盛り満して、我に謂ひて言はく、「唯、須菩提、若し能く食に於て等しくば、諸法も亦等し。諸法等しくば、食に於ても亦等し。是の如く乞を行じ、乃ち食を取るべし。（中略）。一切衆生に於て怨心有り、諸仏を謗り、法を毀りて衆の数に入らず、終に滅度を得ず。汝若し是の如くならば、乃ち食を取るべし」と。時に、我、世尊、此語を聞きて、茫然として、是れ何の言なるやを識らず。何を以て答へんかを知らず。便ち、鉢を置きて其舎を出でんと欲す。維摩詰言はく、「唯、須菩提、鉢を取りて懼るること勿れ。意に於て云何。如来所作の化人、若し是事を以て詰らんに、寧ろ懼るること有りや否や」。我言はく、「不」。維摩詰言はく、「一切の諸法は幻化の相の如し。汝懼るる所有るべからざるなり。所以はいかん。一切の言説は是相を離れず、智者に至りては文字に著せず、故に懼るる所無し。何を以ての故に。文字は性を離る。文字有ること無し。是れ則ち解脱なり。解脱の相とは即ち諸法なり」と。維摩詰、是法を説ける時、二百の天子、法眼浄を得たり。故に、我彼に詣りて疾を問ふに任へず』と。

（弟子品、第三）

(4) 淮南子の齊俗訓にあり。

(5) 講習豈無レ楽、鑽磨未レ有レ涯、書非レ貴二口誦一、学必到二心斎一、酒可レ陶二吾性一、詩堪レ述二所懐一、誰言二曾点志一、吾得二与レ之偕一。
（全集、巻三十六、紹興二十三年癸酉十五歳条）

(6) 回曰、敢問二心斎一、仲尼曰、若一レ志、無二聽レ之以レ耳、而聽レ之以レ耳、無二聽レ之以レ心、而聽レ之以レ気、聽止二於耳一、心止二於符一、気也者、虚而待レ物者也、唯道集レ虚、虚者心斎也、顔回曰、回之未二始得一、使、実自回也、得レ使レ之也、未二始有一回也、可レ謂レ虚乎、夫子曰、尽矣。
（荘子、人間世）

(7) 世尊臨二入涅槃一、文殊請仏再転二法輪一、世尊咄云、四十九年住世未二嘗説一字一、汝請、吾再転二法輪一、是曽転二法輪一耶。
（葛藤集、巻上）

(8) 挙梁武帝問二達磨大師一、如何是聖諦第一義、磨云、廓然無聖、帝曰、対レ朕者誰、磨云、不識。（雪竇百則頌古、第一則）
これは鵞湖の会に赴く途次に於いて、兄復斎の
孩提知レ愛長知レ欽、古聖相伝只此心、大抵有レ基方築レ室、未レ聞無レ址忽成レ岑、留二情伝註一翻榛塞、著二意精微一転陸沈、珍重友朋相切琢、須レ知至楽在二于今一。
（宋元学案、巻五十七、梭山復斎学案、鵞湖示二同志一詩）
の詩に対して作れる象山の次韻詩の後半であるが、その前半は次の詩である。
墟墓興レ哀宗廟欽、斯人千古不磨心、涓流滴到滄溟水、拳石崇成泰華岑。
鵞湖の会三年後、朱子は象山・復斎の詩に次して、次の詩を賦している。
徳業流風夙所レ欽、別離三載更関レ心、偶携二藜杖一出二寒谷一、又枉二藍輿一度二遠岑一、旧学商量加二邃密一、新知培養転深沈、只愁下説到二無言処一、不レ信二人間有二古今一。
（象山全集、巻三十六、年譜三十七歳条）
朱子は象山を称讃し敬服する反面、その簡易の学を主唱することを愁えている。

(9) 義利の説は、論語、里仁第四に
子曰、君子喩二於義一、小人喩二於利一。
とある。これは憲問第十四に於ける
子曰、君子上達小人下達。

と意異ならない。故に象山も

上達下達、即是喩〻義喩〻利。

（全集、巻三十五）

と述べている所である。彼は義利公私を分けて

惟義惟公、故経〻世、惟利惟私、故出〻世。

（全集、巻二、与〽王順伯〼）

と述べているが、この義利公私を以て儒釈を分看し、儒は義にして公、釈は利にして私としている。

(10) 題〽慧照寺〼

春日重来慧照山、経年詩債不〽曾還〼、請〻君細数題名客、更有〽何人似〽我頑〼。

(11) 宋元学案、巻五十八、庭顕条参照。

(12) 楊・袁・舒・沈の四先生については、宋元学案に於ける巻七十四の慈湖学案、巻七十五の絜斎学案、巻七十六の広平沈川学案を参照。